

第1回教育・文化ふくい創造会議 議事録

日 時 平成19年8月17日(金) 13:30~15:40
会 場 福井県庁7階 特別会議室
出席者 岩下委員、黒木委員、佐野委員、祖田委員、広部委員、吹矢委員、三屋委員、吉岡委員(8名、五十音順)
西川知事
事務局 伊藤教育庁企画幹、加藤教育庁企画幹(学校教育)、山内教育政策課長、前川学校教育振興課長、中島高校教育課長、高橋義務教育課長

開会

教育政策課長 本日は大変お忙しい中、第1回目の「教育・文化ふくい創造会議」にお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。
まず、開会に当たりまして、西川知事からご挨拶を申し上げます。

あいさつ

西川知事 一言ご挨拶を申し上げます。
今日は大変お暑い中、多少曇りのかかる日でもありますが、各委員の皆様方には「教育・文化ふくい創造会議」第1回会議にご出席いただき、厚くお礼申し上げます。

私自身は、この春、知事2回目の当選を果たすことができたところでございますが、マニフェスト「福井新元気宣言」を柱に、県民の皆さんの生活や暮らしの質をより一層高めていくことを政策として掲げてございます。

中でも、福井県の特色を活かした、独自性のある教育・文化を創っていくということは、我々の一生の教育ということでありまして、人材の育成でもございます。いろいろな意味で生活の基本に関わる事柄であり、最も大事なことではないかと思っております。

福井の子どもたちが、郷土福井を愛する心を持ち、協調性、あるいは倫理観を身に付けまして、福井のみならず、日本、そして世界を舞台に活躍していく、こういうことが大事でございます。

その可能性を最大限に伸ばせるような、これ自身は、マニフェストの中では、「ていねいな教育」、また「きたえる教育」という言葉を、もちろん教育委員会で中心的に実行していただかなければなりません、知事としてそのようなことを思いまして、マニフェストに掲げました。

さらに、一般的な学力のみならず、文化・スポーツの振興などを加えながら、子どもたちの総合的な、広い意味の学力、学ぶ力と言いますか、そういうことを向上していくことが重要だと、私は思っております。

現在、国においては、教育再生会議を設置し、我が国の教育改革の方向性を議論しております。本年6月の第二次報告では、授業時間数の増加、また授業内容改善のための教員研修の充実など、これまでの教育の方向の見直しや、徳育の実施など、基本的な方向性が提言されています。

しかし、福井県の子どもたちに「総合的な学力」を身に付けてもらうためには、国における検討状況は参考にしながらも、福井県の実情に即した独自の教育改革を進めていくことが重要であります。

例えば、福井県のご出身の白川静先生は、漢字学と言いますか、文字学の研究を長い間続けられました。そして我々は白川先生の文字学と言いますか、

こういうものを教育の現場で使わせていただけないかなと考えておりました、国に構造改革特区の提案をしました。

つまり、小学校6年間でどういう漢字を学ぶかというのは、配当表というのがございます。これを弾力化して、3年生の文字が出てくるけれども、これを1年生のときに一緒に習うと学びやすいのではないかと、あるいは、例えば福井県の「井」という字は誰でも知っているはずなんです、これは小学校では教える中には入っていないとか、色々こういうことがありまして、これを全体として学んだ方が、子どもたちの負担にもならないし、また学びやすいんじゃないかと。子どもが一番学校で小さいときに苦勞するのは漢字でありますので、これをいかに苦勞なく、楽しく覚えられるかが重要であります。そういうことを文部科学省に特区提案しましたところ、何度かやり取りしているうちに、現在でも自由にできるんだという回答をいただきました。

このように、国の色々な制度について、我々が色々申し上げますと、物事が変わってもきますし、また、弾力的な地方での教育が可能ではないかということもございますので、我々としては、国と協力しながら、一方で福井独自の制度を積極的に提言していくというような、そういうことが重要であると思っております。

今回の「教育・文化ふくい創造会議」では、福井県の現状と課題を踏まえ、今後の教育・文化政策について自由にご議論いただき、分かりやすく楽しい授業を行うための指導力の向上であるとか、あるいは、どちらかと言いますと、福井県が他の優れた分野に比べて少し弱い、理科や数学などのサイエンス教育と言いますか、そういう問題についての改善など、色々な具体的な事柄、これが全般の教育につながると思いますか、そういう項目を取り上げていただいて、ここで具体化していく、ご提言いただきたいというのが私の思いでありまして、これは、今日教育長もおりますが、教育委員会を中心に、この議論の中で鋭意やっていただきたいということでありまして、そういう意味で幅広いご意見を皆様からいただくことが重要かと思っております。

委員の皆様方には、短い期間に集中して議論をしていただくことになると思いますが、どうかよろしく願いをいたしたいと思っております。

冒頭、はなはだ簡単ではございますが、私自身の知事としての思いを申し上げ、積極的かつ具体的な、福井県の子どもの将来につながるご提言を少しでもたくさんいただいて実行できればと、このように思っておりますので、どうかよろしく願いいたします。

委員、事務局の紹介

教育政策課長

それでは、本日出席の委員のご紹介をさせていただきたいと思っております。

正面に向かいます、左側にお座りでございます、スポーツプロデューサーで福井ふるさと大使の三屋委員、(株)ベネッセコーポレーション高校・大学部副部長の岩下委員、福井大学教育地域科学部学部長の黒木委員、次に右側でございますが、福井県立大学学長の祖田委員、福井新聞社特別顧問の佐野委員、前福井県中学校教育研究会会長で長年理科教育に携わってこられた吹矢委員、福井県高等学校PTA連合会会長で元宝永小学校・明道中学校PTA会長の吉岡委員、福井県教育長の広部委員でございます。

なお、本日は、国立教育政策研究所教育政策・評価研究部長の小松委員、同志社女子大学教授の左巻委員、若狭ものづくり美学舎チーフ・ディレクターの長谷委員は、都合により欠席となっております。

それから、事務局を紹介いたします。教育庁企画幹の伊藤、同じく企画幹で学校教育担当の加藤、学校教育振興課長の前川、高校教育課長の中島、義

務教育課長の高橋、教育政策課長の山内、以上でございます。

- 会議の趣旨、進め方の説明
- 教育政策課長 それでは、はじめに、教育・文化ふくい創造会議の趣旨と全体の進め方について、説明させていただきます。
- 教育・文化ふくい創造会議は、本県が抱える教育・文化に関する諸課題の改善策、教育・文化の新たな振興方策等について、県内外の有識者の皆様方にお集まりいただきまして、協議・提言いただくために設置させていただいております。
- 全体の進め方ですが、あらかじめ県教育委員会で設定いたしました協議事項ごとに2～3か月程度で提言をいただきまして、提言をいただいた後、また改めて新たな事項について協議いただくという形式をとらせていただきたいと思います。
- 今年度は、第1次の協議事項として、「教員の指導力向上策」、「理科・数学教育の充実」、第2次の協議事項として、「小・中学校における少人数学級等の推進プランである『元気福井っ子笑顔プラン』の見直し」、「教員の学校事務を軽減し、子どもたちに直接向かい合う時間を増やすための『学校マネジメント改革』」、第3次の協議事項として、「ふくい文化の振興」を予定しております。
- また、委員につきましては、テーマ毎に専門家の方にはできるだけ入っていただきたいという趣旨もございまして、固定メンバーではなく、テーマ毎の委員構成とさせていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。
- 会議は、月2回程度のペース、1つのテーマについて計4～5回程度の開催を予定しており、委員の皆様には、短い期間に集中してご議論いただくことになろうかと思っております。いずれの事項につきましても、本県において早急に解決すべき重要な事項でございますので、よろしく願いします。
- 座長選出
- 教育政策課長 それでは、議事に入ります前に、創造会議の座長ならびに座長代理を選出させていただきますと思います。
- 設置要綱によりますと、座長は、会務を総理し、創造会議を代表することとしております。また、座長代理は、座長を補佐し、座長に事故があるときまたは欠けたときは、その職務を代理することとなっております。
- 座長は委員の互選により選出することとなっております。どなたかご推薦はありませんでしょうか。
- 吹矢委員 事務局一任。
- 教育政策課長 今、事務局に一任する旨のご発言がありました。そのようにさせていただいてよろしいでしょうか。(各委員から、異議なし)
- ありがとうございます。
- それでは、祖田委員にお願いしたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。(各委員から、異議なし)
- ありがとうございます。それでは祖田委員、座長席への移動をお願いしたいと思います。
- 座長あいさつ
- 祖田座長 ただ今、座長に選出されました祖田でございます。知事さんからお話があ

りましたが、この会議は、福井独自の教育のあり方を審議するというので、大変重い会議ではないかと思っております。皆様のご協力を得まして、いい結果が出るように努力したいと思っておりますので、どうか、よろしくお願いいたします。

昨今、報道でもありますように、子どもたちの学力の後退、不登校、いじめ、学級崩壊など、さまざまな問題が生じております。また他方、親の側でも、子どもの虐待というようなことも起こっており、大変残念な状況でございます。

私も福井に参りまして、都会の子どもたちと比較をしておりますが、福井の子どもたちは大変素直で、磨けば玉になる存在ではないかと思っておりますが、全国的な流れの中で、同じような問題もたくさん起こっております。

特に、私が大学におりまして感じておりますのは、大学のほとんどの若者は社会に出ていくわけですが、社会に出るちょうど前の段階を預かっているということになります。最近、少子化ということで、家庭でも大変大事にされている、悪く言えば、甘やかされていると言いますか、そういう感じもしております。他方、社会の方は、競争、競争ということで、厳しさが増しており、それを克服して社会で活躍するには、大きな努力がいるのではないかとと思っております。

こうした様々な子どもたちをめぐる問題がございますので、この会議で十分忌憚のないご意見を出していただきまして、福井県独自の新たな教育の姿というものが確立されていけばいいのではないかとと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

座長代理指名

教育政策課長

ありがとうございました。次に、設置要綱第4条によりますと、座長代理は座長が指名することとなっておりますので、座長に指名をお願いしたいと思っております。

祖田座長

それでは、佐野委員をお願いしてはどうかと思っておりますが、よろしいでしょうか。(各委員から、異議なし)
ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

教育政策課長

それでは、以後の議事進行は座長にお渡ししたいと思います。祖田座長をお願いします。

「教員の指導力向上策」について

祖田座長

では、早速、議事に入ります。本創造会議における協議事項は、先ほど事務局から説明がありましたように、「教員の指導力向上策」、「理科・数学教育の充実」です。

それでは、まず「教員の指導力向上策」について、事務局から論点および現状と課題を説明いただき、皆様方から意見をお伺いしたいと思います。事務局、よろしくお願いいたします。

加藤企画幹

それでは、私の方からご説明させていただきます。お手元の資料1「教員の指導力向上策について」をご覧くださいと存じます。

まず、1ページでございます。参考にお示ししてございますが、「教育再生会議第二次報告」におきましては、学力、情操、意欲、体力の調和の取れた徳のある人間に成長することが大事であるということで、そのために必要な

力として、第1に学びの基礎、第2に基礎的・基本的な知識・技能、知的好奇心、豊かな情操、学ぶ意欲・態度、忍耐力、チャレンジ精神、第3に、自ら課題を発見し、考え、判断し、解決していく能力や志、公共心、また社会性、思いやる心、第4に、それらを実社会や職業生活で生かしていくための行動力、協調性、コミュニケーション能力、思考力、創造力、リーダーシップ、第5に高度な独創性、専門性、国際性が示されています。

本県におきましても、未来を担う子どもたちが、社会における様々な分野におきまして、郷土を愛する心を持ち、協調性や倫理観を身につけて、世界の舞台上で活躍できる人間として育ててほしいと考えております。そのためには、自己の可能性を最大限に発揮し、急激に変化する現代社会をたくましく生きていくための「総合的な学力」を身に付けることが必要ではないかと考えております。

次に、4ページをお開きください。そこにお示ししておりますのが、本県における教員研修の現状と課題でございます。本県には、教育研究所・特別支援教育センター・嶺南教育事務所で研修を実施しております。その中の一般研修は、先生方が御自分で選択なさって受けていただけるようにと、教科教育を含めまして、たくさんの講座を準備しているところでございます。また、該当者研修ということで、初任者研修、5経年研修、10経年研修等を開設しております。

課題としては、新しく講師になられた方は経験不足であるということでございますし、また大学を卒業なさってすぐに教員として採用されました直採者におきましては経験が不足している。あるいは、「総合的な学力」を身に付けたり、子どもたちが豊かな学校生活を送っていく上では、その基盤となる学級づくりが大切でございます。

そういう意味で、学級経営などの即戦力が必要であると考えられます。そこで、論点でございますが、1ページをお開きいただきたいと存じます。

本県の子どもたちに身に付けさせるべき力、どういう力を身に付けさせたらよいか、そしてその向上策。また、本県の教員に求められる資質や指導力とはどういうものなのか。教育政策の成果を測る指標はどういうものが望ましいか、などを含めまして、本県の子どもたちの総合的な学力を伸ばすための教育政策の方向性はどうか、ということでご議論いただきたいと存じます。

次に論点2でございますが、5ページをお開きください。そこにお示ししておりますのが、本県における校内研修の実施状況でございます。なんと申しましても、教員の指導力向上を図るためには、それぞれの学校におきまして、授業を実践し、公開し、先生方からご意見をいただいて、確かな指導力を身に付けていくことが大事でございます。

また、本県における新採用教員への対応といたしましては、現在、教員として成長を遂げることを支援するための「初任者アドバイザー」というのを本県ではつくっております。そして、校内の指導教員、教科指導教員等も含めまして、初任者の相談相手になったり、また色々な面での授業を含めまして、色々な児童・生徒の指導について初任者の指導役を担当しているということでございます。

さらに、本県におきましては、学校現場での経験がない直採者の新採用教員に対しましては、一定期間、TT（ティーム・ティーチング）で授業を行うなど、手厚く支援しているところでございます。しかし、初任者アドバイザーによる支援方法ですとか、各学校でご計画いただいております指導内容等につきまして明確なマニュアルがあるわけではございません。初任者の二

ーズ等に十分対応できているとは限らないなどの課題があるわけでございます。そこで、論点2でございますけれども、学校現場における教員研修をどのように充実・強化していったらよいか、ということについてご議論いただきたいと存じます。

次に、7ページをお開きください。現状と課題をごらんいただきたいと存じますが、本県が設置しております教員研修機関の概要、機能、組織体制、担当業務でございます。

また、8ページをごらんいただきたいと存じます。ここには、各都道府県教育センター等の指導主事配置数をお示ししてございます。残念なことに本県では、教育研究所等の研修機関におきまして、指導主事が配置されていないという状況でございます。

次に、10ページをお開きいただきたいと存じます。教員の指導力向上のための事業をお示しさせていただきました。これは、校内における研修を本県におけます研修機関のみならず、民間の教育機関へ教員を派遣したり、民間の教育機関から講師に来ていただいて、研修をしたり、などしながら、色々と教科指導であるとか、進路指導であるとか、小・中・高を含めまして、教員の指導力向上を図っております。

そこで、論点の3でございますが、7ページをご覧ください。県の研修機関における研修カリキュラムであるとか、体系、組織体制の見直し等も含めまして、校外研修機関における教員研修の内容をどのように充実・強化していったらよいかということで、ご議論をお願いしたいと存じます。

次に、11ページをお開きください。本県におきます地元の高等教育機関であります福井大学におきましては、教職大学院の平成20年4月開設を目指して、現在文部科学省に設置認可を申請中とお聞きしております。また、福井大学からは、教育研究所主催の研修講座に講師をお願いしております。今年度は8講座におきまして8人の教授の方や准教授の方においでいただく予定でございます。

また、12ページをご覧ください。本県の教育研修機関についてでございますが、将来的には独立行政法人化の構築を見据えまして、県の教育研修機関の組織、体制についてハード面も含めた在り方を検討することが必要ではないかと考えております。

そこで、論点4でございますけれども、県と地元の高等教育機関との「共動」による新たな教員研修体制をどのように構築していったらよいかということでご議論をお願いしたいと存じます。以上でございます。

祖田座長 ありがとうございます。また、本日欠席された委員の皆様から、「教員の指導力向上策」についてご意見をいただいております。

加藤企画幹 それでは、本日ご欠席の委員の方から、ご意見をいただいておりますので、簡単に触れさせていただきます。

本日配布させていただきました資料3をご覧ください。小松委員からのご意見でございます。学校教育の質の向上は、何といたっても教員の指導力如何にかかっているということで、3つのご提案をいただいております。

授業研究、授業評価の充実ということでございますが、特に校内研修などの際に、優れた授業とは何かなど、実践的な研究を進めてほしいということでございます。

2番目でございますが、教員の指導力は、個々の人の努力や研修に任せる

だけでは期待される成果は得られない。学校全体の協働体制の下での指導力の向上が重要である。そのためには管理職がリーダーシップを発揮することが大切であり、管理職研修の充実を期待するということでございます。

3番目でございますが、マイナス・イメージの「指導力不足教員」の問題などが先にクローズアップされているが、プラス・イメージの優れた教員の状況把握であるとか、優秀教員を表彰したり、授業の実践を紹介するなど、プラス思考の教員政策を行ってほしいというご提案をいただきました。

次に、資料4をご覧いただきたいと存じます。左巻委員からのご提案でございます。

教員の意欲を引き出すためにということで、まず1番目でございますが、同僚性の確立ということで、学年単位での、少なくとも学期に1回は授業研究会を実施する必要がある。そしてその授業研究会では、子どもの学びが保証され、学んでいるかどうかをみてほしいということでございます。

2番目でございますけれども、教育委員会主催の研修だけではなく、民間研究団体の研究会にも参加しやすくすることが大切である。

3番目でございますけれども、学校内の同僚性の確立だけではなく、学校外でも理科のサークル活動などで教材や授業の研究をすることを奨励したいというご提案をいただきました。

次に、資料5をご覧いただきたいと存じます。長谷委員からのご提案でございます。

福井の子どもたちに身に付けさせるべき学力とその向上策ということで、何といっても子どもたちの意欲、社会性を重視しながら学び方や基礎学力をしっかりと身に付けさせたい。そして、学ぶ意義、生きる目的、社会達成意欲を高めて確かな学力を身に付けさせたいということでございます。

そこで、ひとつのことを学校全体で取り組むことが大事である。教育研究所が同じ取り組みをしている各学校を連携させて指導して実践研究を深めることも大事ではないか。

3番目でございますが、子どもは大人の背を見て育つということで、退職教員に対して、学校教育の補完的役割を担うボランティア活動をしていただくとうどうだろうか。また、大人社会のモラルの向上が喫緊の課題であると。まずは、教員自らが使命感を持ち、倫理の確立を図り、範を示す中で、保護者や大人を巻き込んでほしいということでございます。

次に、2ページをご覧いただきたいと存じます。これからの教員に求められる資質・指導力ということで、教師力、授業力、人間力、マネジメント力というご提案をいただいております。

次に、3ページでございますが、校内研修の充実が大事であると。また、外部から講師や参観者を招くなどの工夫が必要であると。さらには、2番目としまして、教員養成から10年を経るまで、研修の一貫プログラムの開発が大切であるということでございます。

論点の3につきましては、教育研究所の改築が必要であると。ハードソフト両面ともに、研修機関の機能強化、そして指導と一体化した教育研究という面も大事であると。さらには、臨時任用講師の研修が必要であるということでございます。

最後でございますが、4ページ目でございます。教育研究所以外の研修機関における研修を実施していくということで、地域社会における教育文化施設、NPOなどでの研修が軽負担で非常に効果的であると。また、それぞれの地域では、文化施設や公民館などが主催する学びの研修会が多く開かれているので、こういう場を利用していくべきではないか。

最後の論点4でございますが、本県は、教職の専門職化、高度化で日本一を目指すべきである。福井県独自の採用条件、管理職等への任用条件、採用後の研修を含めて検討していくべきではないかというご意見をいただいております。以上でございます。

祖田座長

それでは、ただ今、資料の説明、ご欠席の委員のご意見をご説明いただきましたが、ご出席の皆様からただ今の論点につきまして、ご自由な意見を賜りたいと思います。初めての会合でございますので、まずはご自分の自己紹介をしていただきまして、ご自分のご経験も踏まえて、ただ今のご意見・ご質問等を賜りたいと思います。

それでは、お席の順にさせていただきたいと思いますが、三屋委員からお願いします。

三屋委員

あらためまして、三屋でございます。福井県には15歳までいて、その後、東京に出てしまいました。教員は約20年近くやって、その後企業の方に3年ほど行って、また、スポーツの方に戻ってきましたが、その中で、終始一貫して思うのは、やはり、人づくりというのは、パフォーマンスの向上とか、ある程度自分の望む結果を求めるためには、欠かすことのできない大きなものであるということを感じました。スポーツでも、企業でも最終的には人ありきなんだと。人をどのように育てていくかというものが全てにおいて一番の中核をなすのではないかとこのことをいろんなことを通して経験してまいりました。ですので、こと、教育現場ではなくて、県それから日本も含めて、やはり子どもたちをどう育て、育てていくのかということがこれからの日本においても、福井県においても大事なことなんではないだろうか。

ただ、これはスポーツのほうで私も研究してきたことですが、高校生のスポーツや大学生のスポーツでパフォーマンスを向上させようと思ったときに必ずハードルがあります。それはどういったことかと申しますと、取り返しのつかない時間というもの必ず存在します。いくら高い技術を教えようとしても、いくら優秀なコーチを派遣して、そのチームを向上させようとしても、幼児期どういうことをして過ごしたのか、小学校のときどういうことをして遊んだのか、中学校のときどういう先生に教わったのかによって、全くいわゆる器の大きさも違えば、いくらいいコーチを持ってきても全くパフォーマンスといったものが違って来る。

やはり、私スポーツをやっていたときにオリンピック選手を育てるためには、高校生だ、中学生だ、小学生だとどんどんどんどん降りていってしまいます。果たして本当にそこまで降りていってよいのか、非常にこちらもジレンマがあるのですが、その辺で一貫した、確固たるリーダーシップを持って一貫した教育が、人づくりというものが必要なんだろうなということをつくづく思っています。今回、私としてはスポーツを通して人づくりをやってきましたが、その部分でお話をして少しでもご協力させていただければと思っております。

今、子どもたちと接していて一番思うこと、危機感を持っていることは、語彙の貧弱さというか、ボキャブラリーの貧弱さというものにもものすごく危機感を感じています。「ヤバイ、ムリ、マジダメー」の三つで全てを語ってしまっている恐ろしさというのがあって、このような状況はどこから来たのだろうかと思っております。

英語を学ぶと日本語のすばらしさがよく分かると思うんですけど、「雨」って英語で「rain」とか「shower」とか三つくらいしかないんですよ。でも、

日本語で言うと、「こぬか雨」だとか「五月雨」とか「雷雨」だとかいろんな言葉があって、「雨」を一つとるだけでもたくさんのボキャブラリーがあって素敵だなと思うんですね。だから、そういうことも含めて、先ほどの郷土を愛する心を持ち、協調性、倫理観を身に付け、世界を舞台に活躍できる人間といったときに、語彙の貧弱さというのが、特に福井県なんかは自然が豊かなのでこの部分で、ボキャブラリーの豊富な子どもたちを育てるためにはどうしたらいいんだろうかというのを福井県の独自性として捉えていただいただけだとありがたいなと思います。

岩下委員

はじめまして、岩下と申します。今の私の仕事と今回のこの委員の関係を少し考えてみたのですが、実は私福井の出身でもないですし、このメンバーの中では、おそらく教育というところでご飯を食べさせてもらっている立場というところで、この委員の中に参画させていただいていることとなります。

私の会社では、福井県の模試に関して、事務局のお手伝いをさせてもらっているという関係でお声が掛かったと思っております。私自身は九州の出身なものですから、先ほど三屋さんがおっしゃったような福井県ならではの土地勘はありませんが、できるだけ地に根ざしたコミュニケーションができる会議になればいいなと思って参加させていただいております。

私自身は今、高等学校を対象にした仕事をさせていただいており、学校の先生方と話をさせていただく機会も非常に多くあります。その中で、先生たちが、一様に今悩まれているものは、大学入試になると数で判断されてしまう要素。決して否定もできないし、逃げることもできない、前向きに取り組まないといけない中で、本当に高校生が10年後、20年後、社会の中核として、骨太な大人になっていくためのトレーニングをするための期間であるということをお分かりいただいている先生方が、「時間がない」ということをやはりおっしゃっている。で、今回のテーマになっているような先生方の指導力、その力を上げるという云々ではなく、その環境をどうしていくのかという面を少し考えた方がよいのかなと思っております。

私自身は今、私企業で仕事しておりますが、最近入ってくる若い人たちは、すぐに答えを求める。「どうすればできるんですか」と言います。やはり考える回路がショートカットされてしまう部分を感じますので、ちゃんと自分の中で反芻して、自分なりの答えを出せるような大人が育つようなところを少し考えていければなと思いながら参加させていただいております。立場上、他の県の事例などをご紹介するといったことはできるかと思っております。その辺りでもご協力させていただければと思っております。

黒木委員

福井大学の学部長ということで参加しております。特に、今日の論点の中では、論点3、4の教員研修ならびに高等教育機関との「共動」という関係の中で、福井大学としての役割を地元と一緒に果たし、教員の応援団になれたらなと思っています。

特に教員バッシングが強い中で、我々はどのようにして教員を勇気づけるかというようなところで、これを支援していくようなシステムなり、「共動」してやっていくような大学院づくりを目指していきたいと思っています。そういう観点からお話させていただこうと考えています。

一つひとつの論点については、また後で意見を述べさせていただきますが、とりあえず、主として論点3、4のところ、大学として教員の応援団となれると思うだろうし、また論点1、2に関しましては、学力ということで問題になっているわけですが、PISA等の調査でございますように、学

習の成果というよりは、学習したものをどう使う、どう我々がこの世の中で生かしていくか、という観点からの目標というものをどう付けていくかということを確認にする必要があるのかなと思っております。

広部委員

本日はご出席いただきありがとうございます。先ほどは、学校教育担当の企画幹から、本県の教育の実情について説明がありましたが、また、知事のあいさつの中でもありましたが、福井県の子どもたちをいかに育てていくか、10年、20年、30年後に花開くためには、やはり今の教育が大事であり、教育の問題を県政の最重要課題として位置づけ、私ども教育委員会は取り組んでいます。ご承知のように、国では教育改革関連三法案が可決・成立し、教育再生会議でも様々な議論がなされています。また、教員免許の更新制や土曜日授業などいろんな組織面・制度面の改革がなされようとしています。私どもも県内の市長教育委員会と連携をしながら、その対応を進めているところです。

肝心なことは、福井県の教育をいかに向上させていくか、それが私どもに与えられた大きな課題でございます。

その中で一番大事な問題が、今回協議をいただきます「教員の指導力向上」でございます。先ほどの意見の中で、現場の教員の先生の多忙化がございましたが、私どももその問題も併せまして「多忙化解消、学校マネジメントの改革」についても並行して進めていきたいと思っております。

今回も限定的な議題ということではなく、いろんな皆様方の専門的なご意見も多々あるかと思しますので、そのようなご提言についても、今後、積極的にお願いしたいと思っております。

吉岡委員

高校PTA連合会の会長ということで参加させていただいております。また、小・中とPTAに参加させていただいたこともあります。振り返ってみますと、総合的な学習の時間を拝見させていただいたことがあり、非常に子どもたちが目を輝かせながら、課題に取り組んでいることが印象的でした。非常に小さい子どもたちが総合的な学習の時間の中で、いきいきと取り組んでいる姿を見て、これからの子どもたちが非常に将来楽しみだなど、そういった教育がなされていることに対して非常に頼もしいなと感じました。

また、先ほど多忙という話が出ましたが、子どもたちが将来、立派な大人になれるように、PTAというか保護者の立場として、県にご協力させていただければと思います。皆さんからのご意見も聴きながら、私自身も勉強するつもりで参加させていただいております。

吹矢委員

私は、今年の春、定年退職をさせていただきましたが、昨年度まで教育現場にいました。また、県の中学校教育研究会の係をさせていただいておりました。そういう関係でこの場に参加させていただいております。

子どもたちの実際の学習ですが、学ぶ意欲を持っている子は、どんどん先立って進んでいける。ところが、意欲が今一というような場合には先に進みにくい。そのような意欲付けをいかにしてやれるか、現場の先生は考えています。

それから、授業研究についてですが、先ほど多忙化の問題が上がりましたが、授業の研究をしている時間が、非常にとりにくいことがあります。中学校などでは部活動もありまして、時間に追われてしまい、仲間と授業研究の話をする時間も限られてしまう。そのような中で、いかに子どもたちに意欲付けをし、子どもたちに力をつけていくかが、どうかして解決していかな

ければならない問題だと思っています。

特に、福井県では、30人学級とかスクールカウンセラーなどの不登校対策とかいろいろ教育関係に力を入れていただいております、非常に教育現場では助かっていますが、そういう助けを受けながら、いかに子どもたちを福井県の子どものとしてしっかり育てていくのか、皆さんと一緒に考えさせてもらえたらと思っています。いろいろ他の県のことも教えていただきながら、よい提言を出せたらと思っています。

佐野委員

私は、昭和40年に新聞社に入りまして、ちょうど42年になります。その間、30年間は新聞記者をさせていただき、その後の10年間ほどは事業局というところで芸術・文化、スポーツ関係のイベント関係事業などをさせていただいた。そういう経験も含めて、今回、教育・文化ふくい創造会議の委員にご推薦いただいたとのかかなと思っています。教育が、これからの福井にとってだけでなく、日本の将来を決めるような、最大限の、また結果がなかなか見えないところと悪戦苦闘していかなければならない大きな課題であろうと思っています。そういう意味で、この会議の一員として、微力ながら一生懸命やらせていただきたい。

指導力の向上についての捉え方として、私個人としては二つの観点で見えています。一つは教師自身のモチベーションなど主体的な条件の問題。もうひとつは、その先生方の力が発揮できるような客観条件をどのようにしていくのか、その問題も一つあるかと思えます。それは、学校現場また教育委員会も含めた人間関係の問題もあるでしょうし、教育体制や労働の多忙さとか条件の問題もあるかと思う。そのような客観条件を今後どのように整備していくのか。それと先生個人の持っているモチベーションいわゆる主体的条件をどうつくり上げていくかという2つの側面を、戦略的な立場で、また長い目でかみ合わせていくことが大事なのではないかと思っています。

まず、勤労意欲というかモチベーションの問題については、どの会社・どの分野でも大きな課題であると思うのですが、やはり先生たちがいかに意欲を持って子どもを育てるか。そして子どもたちに学ぶ意欲が付いていく。それが、授業が楽しくなっていくことに繋がっていくわけですから、まず、モチベーションをどう高めていくかが一つあるかと思えます。これまで、負の遺産というかマイナスの面ばかりが出ていまして、不信感をあおるような傾向がありますが、学校の先生は皆さん遅くまで仕事をなさっておられるし、一生懸命やっておられる方が圧倒的多数だと思います。そういう意味での学校の先生に対するリスペクトというか敬愛の念が、一部の先生方の乱れみたいなもので、全体の不信感をあおっているような気がします。改めて、教育をする立場の先生に対する社会全体のリスペクト、敬愛の念を持って、先生自身も自覚と責任を持つような関係がつけられるべきではないかと思えます。

それで、それぞれ世間というものがあって、学校には学校の世間、会社なら会社の世間、新聞社なら新聞社の世間があって、いろんな世間があるので、その世間が社会全体の水準からずれたりすることがあるので、異業種交流じゃないですが、いろんな分野の考え方との交流や幅広い考え方を付けていくということが、広い意味での指導力を身に付けていくこと、人間的な幅の広さを身に付けていく上では大事なのではないかと思う。

指導力も単純に技術的・教科的な、先生のすばらしい指導力で5教科が向上することは大事であるが、それだけでなく、プラスアルファの指導力みたいなもの、人間的な魅力を付けていく。そういうものも合わせた広い意味で

の指導力も大事だと思うので、そういう意味で異業種の交流も大切かと思えます。

祖田座長　　ひとととり自己紹介と若干のご意見を頂戴しましたが、なにぶん時間が限られております。まだ、しばらく時間がありますので、どの論点についても結構でございますので、どなたからでもご発言いただければと思います。

三屋委員　　「教員の資質」と先ほどからおっしゃっていますが、教育長にお伺いしたいのですが、福井県の教員採用の基準というものはどのようなものでしょうか。どこを一番大事にしているのかなど、そういうものがあれば、話しをしていても内容があっちこっちにいつてしまうことがないのではないのでしょうか。

広部委員　　ちょうど今、教員採用試験の真っ最中でございます。まず、都会と違いますところは、応募者は、福井県の募集枠90名に対しまして、約1200名ほどの募集があります。その辺りが東京などの都市部とは違うところであり、倍率が高いということは、やはりそれだけ優秀な人が集まってくるという一つの前提があります。

それで、具体的な選考方法としては、専門的な教科の問題、一般的な教養の問題、今まではそれが中心だったわけですが、近年は、どこの県でも一緒だとは思いますが、やはり人をいかにして見るかということ。授業中にどういった対応をとれるか、その辺りも見させていただいている。

ということで、面接に重きを置いています。面接員についても、教育委員会の中だけではなく、市の教育長であるとか、民間の企業経営者の方なども面接員に入っていて、人物をよく見ている。教育現場において何事でも対応が取れるという資質を中心に見させていただいている。このように、学力面だけでなく、いかにして子どもたちとうまくコミュニケーションが取れるかという面を含めて総合的に見ています。

三屋委員　　例えば、モデルになるような理想となる教員像があって、それに近い人を採用しているとかありますか。朗らかであるとか、活発だとか、笑顔がよいとか、何かありますか。

広部委員　　それだけではなく、やはり教え方であるとか、子どもたちにいかに接していただくか、また人格の面も含めて総合的に判断しています。

西川知事　　大学卒業後の直接採用者は何人いるのですか。

広部委員　　直採は1割強です。あとの9割弱は臨時任用講師など講師経験者がほとんどです。

西川知事　　地元の大学出身者はどのくらいですか。

広部委員　　3割から3割5分くらいです。男女の比率でいくと女性が約6割です。

三屋委員　　企業でも試験をやると、合格者の9割くらいが女性の場合がありますね。

加藤企画幹　　望まれる教員像は、子どもたちが大好きであるとか、子どもたちが可愛い、

教育愛を持っている人が大切ですし、子どもたちに授業をできる人、教師としての強い使命感を持っていて、視野が広く、精神的にもたくましい人、高い専門性を持っているような人です。

本県では個人面接だけではなく、今年から模擬授業というか、課題を与えてそういう場合にどういうふうに対応できるかということでも資質を見させていただいています。

広部委員

本日の話題の前提として、黒木先生から教職大学院についてご説明していただいた方がよいのではないのでしょうか。

黒木委員

では、お手元にパンフレットがいらっしゃると思います。会議の資料ですと、資料1の12ページを見ていただくと分かります。

教員指導力ということ、それから最近の教員採用の年齢構成も非常にいびつになっているという中で、一つ言われておりますのが、いわゆるリーダーになる教員というものを学校の中で育てていって、管理職は勿論ですが、学校をまとめリードしていく、若い人のリーダーとなる教員が必要とされているということが第一点でありまして、そういう人をどう育てていくかということがあります。また、いわゆる教員の専門性ということ学校のなかの教員専門性ということをどういうふうに捉えていくかという中で、教職大学院の考え方がまずできたということでもあります。

教職大学院としては、スクールリーダーを育てるということの一つの目的にしてあります。それから、もう一つは教職専門性の開発です。これは、12ページの教職大学院というところを見ていただきますと、現職の先生との関わりが分かるかと思いますが、いわゆる新任の教員であるとか、臨時採用の教員であるとかそのような方たちの教職の専門性をどうふうにつけるかということで、教職大学院の中に教職専門性開発というコースを設けております。あとスクールリーダーの養成という2つのコースを設けております。主としては現職教員を対象とした教職大学院であります。

この教職大学院は従って教育委員会と一緒にやっていくので、教員研修的な色彩は非常に強いのですが、同時にこれからの学校をどう運営していくのか、そういう学校の中の行動をつくっていく、これがもうひとつの柱としてあります。それで、私どもの大学院の場合は、学校拠点ということで、学校の中にながらにして、そこで日常的な授業・学校運営をやる中で大学院に入ってきていただいて、そこに大学院の教員が出かけていって指導すると、一緒に学校そのものを運営、また学校が抱える問題を解決していくというふうな大学院を志向しています。教職専門性、リーダー養成、学校における実践力、マネジメント力を付けていくそれから学校の理念と責任、公教育の持つ理念と責任を認識した上で教職員の専門性を付けていくことを狙いにしていきます。

従来の大学と違うのはいわゆる研究を主としてやるのではなくて、実践的な力量形成ですので、インターンシップ的な要素が非常にたくさんあります。修士論文も書きません。実際の授業をやりながら、そして学校運営をしながら、その中でいろんな単位を取得していく。そんな形の大学院です。現在、これを専門に対応するスタッフは11名です。あと非常勤が4名の計15名で対応しています。県とタイアップしてこの教職大学院を動かそうとしています。県の方からすでに実践力、指導力のある先生方3名を教授と準教授に派遣していただいています。そのほか、従来から大学にいるスタッフ、全国から公募したスタッフで、福井県の教育力を固めていこうということです。

学校拠点ということですが、福井市内で、小学校1校、中学校1校の拠点校をもうけまして、その拠点学校の先生に大学に入っていただく、またそこに大学の先生が出かけていく。で、一緒に普通の授業をやりながら、先生の実践力を形成していくというやり方です。それ以外に坂井市、鯖江市に1校ずつ拠点校をつくります。

臨時任用の先生については、採用されている学校を中心にして、土日に大学に来ていただくこともありますが、主に大学の教員が学校に行って臨時任用の先生の教職専門性をアップしていくというようなやり方を考えております。

実は、全国に先駆けて5年位前からプロトタイプをやっているわけですが、この教職大学院そのものは、実は福井大学がデザインしたものであります。その意味では福井県発の教職大学院であると考えていただいても結構かと思えます。

祖田座長

ありがとうございました。他にもたくさんご意見があろうかと思しますので、ご欠席の委員が作られて本日提出されたメモがありますが、今日ご発言なれなかったことやアイデア、質問なども結構ですので、ファックスなり何なり自由に、提出していただければと思います。こういう方法を取らないと、もう一つの議論が終わらないという感じもしますので、事務局の方でそのような補完的なことも考えていただきますようお願いいたします。

祖田座長

「理科・数学教育の充実」について
では、次のテーマ「理科・数学教育の充実」についてご協議いただきたいと思えます。「理科・数学教育の充実」について、事務局から論点および現状と課題を説明いただきたいと思えます。

加藤企画幹

それでは、お手元の資料2をご覧ください。1ページですが、本県の小・中学生が理科や数学が好きかどうかという調査の結果です。グラフ1を見ていただきますと、「理科の勉強が好きか」ということで、「好きだ」、「どちらかといえば好きだ」は、小学校合わせますと77.9%ですが、中学校では63.7%という結果でございます。グラフ2でございますが、「算数・数学の勉強が好きか」ということで、「好きだ」、「どちらかといえば好きだ」を合わせますと、小学校では64.8%、中学校では44.0%という状況でございます。学年が上がりますと「勉強が好きだ」という割合が減ってくるという状況でございます。さらに、グラフ3、4では、「理科や数学の授業で勉強したことが社会に出て役立つか」ということで、アンケートをとった結果でございます。

次に、次ページをご覧ください。これは大学生を対象とした「進路選択に関する振り返り調査」によるものですが、小・中学生の頃に「理科の実験が好きだった」という学生が、文系の52.2%に対し、理系では75.1%を占めていることが分かります。

次に、4ページをご覧ください。全国の理科大好きスクールモデル校のアンケートの結果ですが、小学校教員の61.9%が「理科の授業が苦手である」と答え、理科の実験を取り入れる上で「準備に非常に時間がかかる」、また、理科の授業を効果的に行うための対策としては、理科の教員免許状を持っている専科教員の配置してほしいとか、アシスタントを導入してほしいとの意見が多いようでございます。その下の表は、担任以外の教員による理科、算数の授業を実施している小学校の割合を本県と全国とを比較したもので

す。

そこで、1ページにお戻りください。論点1でございますが、児童・生徒の興味・関心を高めて、楽しく分かりやすい理科や数学の授業となるよう指導法をどのように改善していったらよいか、という点についてご議論をお願いしたいと思います。

次に、9ページの現状と課題をご覧ください。本県の大学入試センター試験の数学および理科の平均点でございますが、全国平均は上回っているのですが、他の教科に比べると若干劣っているという現状がございます。また、本県の県立高校の4年制大学への進学状況をみますと、文系と理系では、理系の方が少ない、だいたい6：4の割合であるという現状でございます。

次に、10ページをご覧ください。本県の高校生の進路の実態でございます。進学している生徒は、平成19年3月で55.5%、就職している高校生は22.4%の1,853人でございます。就職者の内訳をみますと、第二次産業に就職した生徒が970人で、そのうちの817人が製造業への就職という状況でございます。また、11ページをご覧ください。県内の原子力・電力関係企業等における就労人口は約1万人、そのうちの約63%は本県出身者であるという状況でございます。本県は繊維や眼鏡、機械産業等のものづくり産業であるとか、原子力産業などが大きなウェイトを占めているわけです。こうした産業に必要な人材育成、そしてその基礎となる理科・数学の学力を向上することが非常に大切ではないかと考えております。

そこで、9ページにお戻りいただきまして、論点2でございますが、高校における受験・就職等のための理科や数学の学力向上対策をどのように充実・強化していったらいいか、ということでご議論をお願いしたいと思います。

次に、論点3でございますが、13ページをご覧ください。本県におきましては、家庭・地域・学校の三者の連携による社会全体の教育力の向上を目指しております。知事のマニフェストにも掲げられておりますが、「福井型コミュニティ・スクール」ということで、保護者・地域の代表者が学校運営に積極的に参加して、地域に根ざした学校運営を目指すのですが、本県では133校の小・中学校で実施しております。今年度中には、全ての小・中学校で実施される予定でございます。

そのほか、専門的な知識や技能を有する地域の人々が、「ゲスト・ティーチャー」として授業に参加してくださったり、小学校低学年の子ども、落ち着いて座ってられない子どもが多いのですが、こうした子どもたちの学校生活を支援する「学校ボランティア」であるとか、子どもの登下校の安全・安心を見守ってくださる「見守り隊」など、本県では、様々な形で地域の方が支援をしてくださっている状況でございます。

また、子どもの放課後の安全・安心な活動場所を確保できるようにということで、「放課後子どもクラブ」を設置しております。文部科学省の調査によりますと、本県の実施割合は全国1位ということでございます。

次に、県内の各大学や企業等におきましては、「学力低下」や「理数離れ対策」、あるいは「職業人の育成」などを目的に、子どもたちを支援するための様々な取組みをしていただいているわけでございます。そこで、こうした機運を捉え、理科・数学教育の面におきまして、県内全域をカバーする本県独自の「共働」システムを構築していくための検討が必要ではないかと考えております。先ほど話をしましたが、地域の方々にいろんな意味でお手伝いいただき、「放課後子どもクラブ」を開設しているわけでございますが、放課後

だけではなく、夏休みや冬休みなどの長期休業を活用しまして、そういう子どもたちの学習や地域活動を支援していくことが重要ではないかと考えております。

そこで、論点3でございますが、地元の高等教育機関や企業、地域人材等と学校が連携して、理科・数学に対する興味や関心を高める「共動」システムをどのように構築していったらいいか、ということでご議論をお願いしたいと思います。

祖田座長

ありがとうございました。本日欠席された委員の皆様から、理科・数学教育の充実についてご意見をいただいておりますが、時間の都合もございますので、後ほど時間があればご紹介するというところで、この場でのご紹介は省略させていただきたいと思っております。

それでは、意見交換を進めてまいりたいと思っております。では、ご着席順にお願いしたいと考えておりますが、まずは、この問題に造詣が深い黒木委員から順番にご意見をいただければと思っております。黒木委員、よろしくお願いたします。

黒木委員

理科・数学教育の充実ということで、今、全国的にいろいろな取組みがなされているわけです。1つは、そういうものをうまく利用していく、特に高等学校段階では、SSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)であるとか、SPP(サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト)であるとか、JST(独立行政法人科学技術振興機構)の事業がありまして、そこに参加していくことによって、理数の実験であるとか力、興味・関心を高めていくことができるのではないかと考えています。それに加えて、もしできるなら寺子屋方式のようなものもやっていく必要があると考えます。

論点3から入りますが、そうなっていくと福井県の中でのマンパワーがどれくらいあるかということで、非常に大きな問題になってきますし、大学としてはいろいろ協力をしていって、こういう「ふくいサイエンス寺子屋」でありますとか、「ふくいサイエンススクール」といったものに協力していこうと考えているわけですが、福井県の中では理系の大学は、福井工業大学でありますとか、県立大学、福井大学がございますので、これらが連携してやっていく必要があるかなと考えています。

それともう1つは、私自身の発想ですが、数学でいいますと「数学博物館」をつくったらどうかと考えています。昨年、ドイツに用事があり行ったのですが、ドイツに「マテマティコム(Mathematikum)」という数学博物館があります。そこは、数学のいろいろ手で触ったりできるものが置いてあって、子どもたちが親と一緒に来て、触ったりして遊んでいるんですね。それ以外に、月に1回講演会などをやって、子どもたちや先生も聴けるようスケジュールが組まれています。

私自身は、動かない拠点みたいなものを福井県内、公民館でもどこでもいいと思うんですが、置いたらいいのではないかと考えます。数学の場合、そんなにお金がかからないですから、手作りのものでも何でも置いて、そこを拠点にして、地域の人で協力いただける人にいろいろやっていただく。これが「サイエンス寺子屋」なのかもしれませんが、恒常的に月1回なり講演会などが開かれていくといいのでは。ちょっと程度の高いものを講演会などの形で提示していくなど、地域のいろんな所で行われるようになることが非常に重要なことだと考えます。そのような環境ができればいいかなと思っております。

今、私としては、卒業する学生にいろんなものを作らせようとしており、とりあえずは、大学のどこか1つの部屋にそういうのを置いて、子どもたちを集めて遊んでもらうことを考えています。地域の公民館などを利用してできればいいと思っている。

あとは、他の方の意見もあるでしょうから、時間がありましたら付け加えて申し上げます。

岩下委員

今、大学で、特にリメディアル(補習)をやらないといけない科目で一番多いのが理科だと認識しています。大学で勉強してほしいことをするための高校理科をやっていないとか、水準に至っていないという環境があることは、よく耳にする話です。入試科目で点数を取ることだけが目的になったような感覚で、理科や数学が捉えられているのかなと思う。

これだけ「好きだ」とか「面白い」と思っている小学生が多いのに、先ほど話がありましたが、総合的な学習の時間で子どもたちが目を輝かしているのが、だんだんと中学校や高校で科目、教科が入試の目的になってしまうというという幻妖を、止むを得ない部分があるのは前提として、変えていこうとすれば、1つ思うのは、上の学校がその前の学校で何をしてきたかということ、縦に、縦にちゃんと分かるという回路を持つことがもう少し必要なのではないかという感じがします。

先ほど、大学の先生が高校の部分をリメディアルしなきゃという話をしましたが、高校の先生も中学までにどのようなことを本当にやってきているのか、指導要領とかカリキュラムではなくて、子どもたちのリアルな声、「こんなことをやってきたよ」とか「ここは分かっているよ」といったとことを知りに行くという回路を仕組みの中でつくと、理科とか数学をもっと面白くとか、役立てるといふふうにもっていけるのではないかという気がしています。

三屋委員

受験・就職のための理科・数学の学力向上と子どもたちが目を輝かせて興味を持つ理科・数学とは、全然やり方が違うと思うんですよ。それを一緒に話しちゃうと。スポーツでしか例えられないんですが、楽しいバレーボールと勝つバレーボールとでは、練習内容が全然違うんですよ。それを一緒に語るのは難しく、「学力も上げたいんだけど、好きな子も増やしたい」というのは教員にとってもものすごく難しくないのかな、と素朴な疑問を感じています。「好きな子もいっぱい増やして、でも学力も向上させて」と言ったら、どんな授業をすればいいんだろうって先生方は迷うんじゃないかなと思ったんですね。

そこで、4つに分けて、好きで、できる子は放っておいていいと思うんですね。でも、嫌いでもできちゃう子がいたりするし、また、好きでもなかなか点数につながらない子がいて、嫌いできない子がいて。どこに焦点を合わせて授業をつくるのかというところが先生方にとって一番難しいところですが、もちろん全部が好きで、できるようになるのが一番なんだろうけど、例えば、中学生は「好きな子を増やそうよ」、高校は「学力を向上させようよ」というのが、考え方としてあってもいいのではないのでしょうか。

佐野委員

今、三屋さんの意見を大変興味深く伺ったんですけども、好きで楽しくやる部分と入試・就職に勝つための勉強とは区別するというのにはあるのではないかな。余談になって申し訳ないんですが、(ニューヨークヤンキースの)松井が高校のときに、高知の明德義塾に4連続フォアボールで歩かされました

けれども、今、松井をメジャーリーガーにしたのは、あれじゃなかったかと言われているが、結局、向こうは勝ったわけですから、勝負師としては、監督としては優れていたんだろうと思うんです。しかし、ピッチャーに真っ向勝負をさせなかった時点においては、教育者として是非が問われるんだろうと思う。そういう要素はあまり極端ではないにしても、多かれ少なかれ当面の受験にどれだけやらせるかというところに絞っていくことも必要だろうけれども、そういったことが理科教育の問題なんかで出てくると思います。

福井新聞社では県や大学の先生とも協力しながら、小・中学生を対象とした「科学アカデミー」というのをやっているんですよ。夏休み中心に年末までに自主研究を募集すると、2万4000点の研究発表が寄せられるんです。それは、いろんな研究がありまして、雪の結晶がどのように作られるとか、霜柱の作り方とか。もうあらゆるジャンルがあり、一日楽しく発表してもらうんですね。パソコンを使って発表するのですが、子どもたちは表現力があるし、積極性もあるし、すごいなあと思う。2万4000点ということは、今、小・中学生は9万人いないと思うんで、8万人としても30%が応募しているわけですね。これはものすごい数です。理科教育では理科学会の先生方も一生懸命教えていますし、ある部分では非常に優れていまして、科学アカデミーは今年14回目になるんですが、過去の優勝者は、大学の先生になったり、お医者さんになったり、第一線で活躍している方が多いという結果も出ているわけです。このように好奇心もあり、好きで、強い関心を持っているにもかかわらず、受験になるとだんだん関心がなくなるのはどういうことなのかなと思います。

吹矢委員

私は理科の教員をしておりましたが、子どもたちは本当に理科が好きなんです。いろんな化学変化とか、観察とかも、「おー」というふうに一生懸命見てくれる。やはり、小さいときには感動、そして生活に役立つものに興味を持ってくれる。それを教える側では、理科は高学年になりますと実験の準備が複雑になってきて時間も費やしますし、何もかもしなくてはならないという大変なことに現実はなっているんですね。

資料1にもあるんですが、小学5、6年の理科の授業に専科教員を置いてもらおうと専念でき、子どもたちの理解に合わせた授業とか、実験準備とかがやりやすくなる。こうしたことにより、子どもたちを意欲的にさせることができる。教員の人数があれば、なるべく小学校高学年は専科教員で授業をしてもらった方が効果が上がると思います。とにかく、小さいときはいかに感動を持たせてやるか、面白いなという意欲付けに力を入れる。そして高学年になると、興味をいかに理論に結びつけて、子どもたちの筆記試験にも対応できるような、もっていき方をするのが一番いいのかなと思います。

それから、中学校の場合ですと、時間的に授業が終わるのが3時半頃になり、帰りの会をして、だいたい4時頃から部活動になります。そうすると理科専科の先生も、若い先生のほとんどは部活動を持たなければならない。次の準備や授業研究が難しくなるので、是非、副担当というようなものを中学校でもつけてもらおうとやりやすくなるのではないかなと思います。

吉岡委員

何を隠そう、私は、理科を吹矢先生に教わりまして、おかげで理科が大変好きになりました。

この間、たまたまいろんな高校のカリキュラムを見せていただいたんですけども、その中で地学を受講する生徒が非常に少ないという話を聞きました。例えば大野ですと竹内均先生といった有名な天文学者がいらっしやいま

すが、実際、地学を専攻できない状況になっている。どうしてかと伺いますと、地学を教える先生がいないということなんですね。天文学や地震などに興味のある子どもたちの芽を摘んでしまうのではないかなという気もいたしました。

例えば、こういう先生の少ない科目なんかでも、専門性のある部分については、学校の枠を超えた何か、ここで言う「ふくいサイエンススクール」みたいな形のものになるのかなと思うのですが、そういったものを考えるべきだと思います。例えば、木曜日の8時間目は、高志高校と羽水高校と藤島高校が共同でそういった授業を行うとか、枠を取り払った教育方法もあるのかなと思います。

それから、ものづくりということでは、機械組合等での業界活動があるんですけども、福井高専や福井工大との連携ということで、新しいものづくりをやっているんですね。実際に機械組合の鉄工所では、若い子たちを学校に送り込んでいます。学生さんにもどんどん、ものづくりと理科・サイエンスと結びつけてあげていく方法をやっていくといいのではないかと思います。

広部委員

本日の課題である「教員の指導力向上策」と「理科・数学教育の充実」ですが、私どももここに職員がおりますが、ほとんどは学校現場からの職員でして、これらの課題について、「アイデア的なものも含めて、何かないか」ということで申しております、いいアイデアがあれば創造会議の場でも出させていただいて、議論をしていただきたいと思っております。

例えば、月並みなことなんですけど、読み・書き・計算を毎日朝10分ずつでもいいから子どもたちにやらせるとか、いろんな案が出ておりますので、またこの場で紹介させていただきたいと思っております。

祖田座長

それでは、各委員から一通りご意見を伺いましたが、若干時間もございますので、さらにご意見を伺っていききたいと思います。特に、言及のなかった論点を中心に、ご意見等はございますか。

黒木委員

先ほどから聞いておりました、少し気になるのが学力の捉え方ですね。受験学力を学力と捉える考え方もあるのですが、例えば、この前テレビで放映があった京都の堀川高校では、進学率が全くゼロの高校だったんですが、子どもたちに理科の実験など好きなことを取り組ませた結果、国公立大学への進学者がかなり増えたんですね。つまり、指導者が必要なんですけども、いわゆる受験学力と好きなことをやるということは、決して別なことではないと思うんですね。

高等学校の教育研究集会などに僕も助言者として行って、よく論争するんですが、「数学の中身をきちっと押さえて教えれば、本当は数学の中身の中に受験学力は入っているんだよ」という話をするんですね。受験学力が大きくあって、その中に数学がちょこっと入っているみたいな考えは逆なんだと。例えば、高等学校の数学でちょっと広い世界を見ていけば、大学入試に出るような問題は実はそれだけ一生懸命やらなくてもできるんです。数学は一つ of 思想性、考え方ですから、どういうふうに作られているかというのを見ていけば、その中に受験学力は入っている。逆にそこをどう広げていくか、高等学校の教材に即しながらも、それだけで終わりとするのではなくて、背景などをもう少し深く指導していくか、ということなんだと思います。そういうふうな捉え方をしないと、結局、大学に入って「もう終わった」といって

勉強しないというふうになってしまうのは、受験的な学力だけを一生懸命練習してきて、興味・関心はないんだと。その先、自分が何かを創造してくというものがないと、その先が行かない。

何故、我々が教育をしているかという、人を育てるわけですから、人を育てるといえるのはどういうことかというのをきちっと押さえていかないと、結局、アンビバレントな話をずっと追求していくことになってしまう。そうではなくて、考え方の発想を少し変えていく。数学の立場から言うと、なぜ多項式が大切かというのと全ての関数も多項式で定義できるんだと。それで多項式が重要なんだと、多項式をずっと見ていけばいいのかということ、もっと広い立場から見れば分かっちゃいます。ここでベクトルを、何故使わなくちゃいけないのか分かっちゃう。もちろん、そういうものの背景を、きちっと高等学校や中学校で教えていくことに重要さがある。

先ほど、西川知事がおっしゃった白川文字学というのは、漢字を系統立てているという点で、算数や数学と同じなんですね。実は、正三角形を正三角型という言葉で教えるのではなくて、「何故、正三角形という形で出てくるのか」というところから迫っていった考え方を体系化していく、そういう指導の方法やものの考え方が必要だろうと思います。

理科はどうか分かりませんが、数学の場合は、体系化された考え方をきちっとつくっていった、それによって子どもたちが成長していく、そういうものが重要なんじゃないかと思います。

祖田座長

一通り意見をいただきました。私も若干追加させていただきたいと思いますが、小・中学校でも教員が努力するというのが一番大事でございますけれども、私を感じますのは、親の方が問題だという声も聞くのですね。「どうしてうちの子は写真の真ん中に写っていないのか。端っこに写っているのか」と、極端に言えば、こういう文句が帰ってくるというようなことを聞いています。やはり、親が子どもに接する機会も少ないということもあろうかと思っておりますので、学校がどの状況にあるのかということを知ってもらう必要があるんじゃないかと、一方では思います。そのために、大学の公開講座等のようなところで、現在の子どもたちが置かれている状況を率直に話して、それを聞いてもらうような機会がつかれるのでは、という気がしています。

それから、理科・数学教育に関しましては、子どもたちが将来何がしたいかというアンケートを毎年やっていると思うんですが、数年前に博士になりたいというのが一番だったことがあるんですね。私もびっくりしました。博士になりたいというのは、子どもの頭の中では、たぶん社会科学じゃなくて、自然科学系ではないのかなと思っています。そういったことで、子どもたちはいろんな興味を持っておりますので、それを生かしてやる。ただ、今、学校では危ない場所に連だして農業体験などをさせる場合には、もし怪我をしたらということで、先生方はそこで踏みとどまられるようなことがあるんじゃないかと思っております。そうしますと、家族として子どもを連れ出してもらような場面をセットすると、親の責任で連れ出してもらって子どもの関心を高めていくことができるのではないかと思います。家族ぐるみの体験の場というのが必要なんじゃないか感じております。いろいろございますけれども、以上2点話をさせていただきました。

それでは、最後に知事さん、何か今までの感想などありましたらお願いします。

西川知事

たくさんのお話がありましたが、1つは、福井大学教職大学院との関係です

ね。これは十分詰めていただいて、地域との関係で有効に働くようにしていただくとうれしいと思います。

それと今日は、付随的な議論が出ましたけれども、部活ですね。これは三屋委員もスポーツですから、いろいろスポーツの議論になりますが、部活の時間とか効果的な指導法。時間がかかり部活に割かれているかなという印象も私はしますので、スポーツ自身の問題でもありますし、他の教科への影響とか、子どもたちへの負担にも関わりますので、折り合いというのをどうつけるのか、私自身、前から感じております。

次に、理科については、実験の話にすぐなるのですが、実験も大事ですし、まとめて実験をするのか、夏休みにやるとか、そういうことも可能でしょうし、理科は実験だけではなくて教授法、教え方の巧拙によって随分興味が変わってくるんじゃないかと私は思います。それから、先生とその他の応援をしてくださる皆さんのパワーのバランスですね。先生が足りないと思うのか、今のままでできるのかとか。他の人たちの応援をしていただくことが可能なのかとかという、マンパワーと言いますと俗っぽくなりますが、そういうのが必要なのかなという気がしました。いずれにしても、理科・数学については、先ほど数学の拠点というお話がありましたが、絶えずそこで学べるとか、あるいは教授法を革新する、変えていくということが、子どもたちの興味にかなり応えられるんじゃないかということも思いました。

それから、言葉の豊富さとか、文字学とかにも関係しますが、教育の継続性、長期的な効果をどう測定するか。これは学力の総合的な測定にも影響すると思いますが、目の前のことではないという視点ですね。また、先生方のいろんなリスクとか、マネジメントをいかに合理的に、全くそれに預からないというわけにはいかないと思いますけど、軽減するやり方ですね。これはまた別の分野かと思いますが、そのようなことですね。

教育は絶えず、どういうレベルをターゲットにして行うのかというような心構えも、難しいところですが、決めないといけないのかなと皆さんの話をお伺いして感じたところでありますが、いずれにしても、私自身、学校で何をしているかというのが明瞭に分かっていないところもありまして、子どもたちがあまりそういうこと言わないということもありますが、特別な場所というか、子どもと先生、あるいは親という関係ですので、普通目に見えにくいところもありますので、できるだけ率直に現場を把握して、有効な解決策を見出すことが大事だと思っています。

門外の方から申し上げましたので、いろいろ違っているかもしれませんが、また教育の立場でやっていただければと思います。

祖田座長

それでは、一通りご議論いただきましたが、まだ十分ではないと思いますので、先ほど言いましたように別途、ご意見をいただきながら進めてまいりたいと思います。では、本日の議事については全て終了させていただき、進行を事務局にお返しします。

教育政策課長

今後のスケジュール

いろいろのご意見をありがとうございました。今ほど、座長の方からご提案がございましたが、本日は第1回目ということで、主に論点と課題を整理しようということでご議論をいただいたところです。2つの協議課題がございますけれども、具体案やご意見等ございましたら、8月末までに紙ベースでいただければ、事務局のほうで整理をさせていただき、次回までにとりまとめをしたいと思いますので、お忙しいところ恐縮ですが、よろしくお願

したいと思います。

今後のスケジュールでございますが、お手元の「参考資料5」をご覧ください。第2回につきましては、9月4日の10時30分からこの会場ということで考えております。次回は、今日のご議論、また、追加いただきましたご意見を基にいたしまして、取りまとめの方向性について事務局の方でまとめさせていただき、それを踏まえたご議論をいただけたら幸いかと思っております。また、第3回目を9月中旬、第4回目の10月上旬にはご提言等を取りまとめる形で1つの区切りにしていきたいと考えておりますので、よろしく申し上げます。

本日の議事につきましては、事務局で整理させていただき、ホームページに掲載したいと考えておりますので、ご了承の程よろしく願いいたします。

それでは、第1回会議はこれで閉会とさせていただきます。本日は、お忙しい中、どうもありがとうございました。

以 上